

|           |   |        |         |              |
|-----------|---|--------|---------|--------------|
| 氏名 (生年月日) | ヤン<br>梁                                   | ヒ<br>喜 | ジン<br>辰 | (1968年8月15日) |
| 学位の種類     | 博士 (文学)                                   |        |         |              |
| 学位記番号     | 文博甲第98号                                   |        |         |              |
| 学位授与の日付   | 2015年3月19日                                |        |         |              |
| 学位授与の要件   | 中央大学学位規則第4条第1項                            |        |         |              |
| 学位論文題目    | 小林多喜二における「歪曲の言説」                          |        |         |              |
| 論文審査委員    | 主査 宇佐美 毅                                  |        |         |              |
|           | 副査 山下 真史<br>島村 輝 (フェリス女学院大学文学部日本語日本文学科教授) |        |         |              |

#### 内容の要旨及び審査の結果の要旨

##### 1. 本論文の目的と構成

最初に本論文の目的と構成を示す。

本論文は、小林多喜二作品を「歪曲」という観点から考察したものである。筆者は、多喜二の作品が多くの歪曲という力加えられてきたことを明らかにし、その歪曲の力学を解き明かすことによって、今日的な視点から多喜二作品を見直し、従来は見えにくくなっていた多喜二作品の本質的な部分を考察しようとしている。

ここで用いられている歪曲にはさまざまな意味が含まれている。まずは多喜二の同時代の歪曲であり、これには外部的な歪曲と内部的な歪曲があると筆者は指摘する。外部的な歪曲とは当時の権力による作品の検閲のことであり、内部的な歪曲とは検閲や処分をおそれる自主的な表現の規制のことである。また、同時代における歪曲とは別に後の時代における歪曲もあると筆者は指摘する。作者の意図に基づく忠実な原稿の復元がなされていない状況で多喜二作品が論じられたり、「プロレタリア文学の作品」「権力と闘った作家」といったイメージの固定化がなされたりすることもまた、一種の歪曲であるとしている。

こうした歪曲の歴史をふまえ、同時代と後の時代のそれぞれにどのような歪曲の力学があるのかを明らかにし、それによって小林多喜二作品受容の歴史と今日からの再検討の意義を追究しようとするのが本論文である。

また、近年には「蟹工船ブーム」と言われる「蟹工船」再読の一大現象が巻き起こった。筆者は翻訳者として「蟹工船」韓国語訳を自ら出版し、韓国における多喜二再読に大きな役割を果たした。その経験もふまえて、多喜二作品の韓国における受容を分析し、多喜二の時代と「蟹工船ブーム」の時代とを比較検討しようとしている。

以上のような目的を果たすため、本論文は以下のように構成されている。

## 序論

### 第一章

小林多喜二「蟹工船」の「集団描写」 ―日本自然主義との関係から

### 第二章

失われたテキスト「一九二八年三月十五日」の伏せ字と削除の問題を中心に

### 第三章

小林多喜二の「師走」「最後のもの」の語り手における「生活する」ことの意味

### 第四章

小林多喜二の「安子」における女性人物の表現

―「党生活者」笠原をめぐる「歪曲の言説」との関係から

### 第五章

「蟹工船」の韓国語訳をめぐる読者の階級認識

## 結論

## 2. 本論文の要旨

本論文は全体を五章に分けて考察をおこなっている。

第一章の「小林多喜二「蟹工船」の「集団描写」―日本自然主義との関係から」では、多喜二「蟹工船」の人物描写の方法として作者が意識的に取り入れた集団描写の問題を、日本文学史との関係から考察している。具体的には、日本自然主義との関係を分析し、多喜二文学の歴史的な意味を探っている。特に重視しているのは、蔵原惟人が「蟹工船」の集団描写に対しておこなった批判であり、筆者は蔵原の多喜二批判の問題点を論じている。

蔵原は「プロレタリア・リアリズムへの道」（『戦旗』、一九二八・五）を発表し、その翌年に多喜二が「蟹工船」（『戦旗』、一九二九・五、六）を発表した。その後まもなく、蔵原は『東京朝日新聞』（一九二九・六・一七、一八）に「蟹工船」の集団描写の欠陥について批判した。蔵原の「蟹工船」への不満は、作者の人物描写における「大衆的な集団」を描こうとしたために個人の描写が十分に描かれていないことであった。しかし、多喜二は蔵原の「プロレタリア・リアリズムへの道」に影響されてその文芸理論の実践として、明確な階級的観点から意図的に集団描写という創作手法をに取り入れた。主人公というものをなくして労働の集団を主人公にすること、それはプロレタリア文学を集団の文学として認識したからこそその選択だった。さらに、多喜二はこのような方法が前作である「一九二八年三月十五日」より一步前進した作品として自評した。しかし、蔵原は「再プロレタリア・リアリズムについて」（『東京朝日新聞』、一九二九・八・一一、一四）でその芸術論を具体化する。人間を描くためには「その人間の意識的な行動のみ」ではなく「意識下の行動」も描くべきだと述べている。このように多喜二と蔵原の間にある集団描写に対する考え方の違いは、二人の間にあるプロレタリア芸術論における認識の距離を示していると筆者は指摘して

いる。

また集団描写という方法は、社会より個人の世界を重視する当時の日本自然主義へのアンチ・テーゼとして使用されている。中村武羅夫は「蟹工船」を「自然主義的観察、自然主義的手法、自然主義的叙述」として批判するが、これに対して多喜二は、「蟹工船」でとった「手法上のレアリズムの遺風」は認めても、新感覚派を「少し模様替した大学生式インテリ形式、通俗小説を少し高級にした俗悪・イージー形式」などと拒否し、「労働者的な形式」を追究していると述べた。このように多喜二は日本自然主義などの文壇の傾向を明確に認識し、そのアンチ・テーゼとして「集団描写」を考えていた。このように筆者は、「日本自然主義」と多喜二との関係を明らかにしている。

さらに筆者は、相馬御風と金子筑水の日本自然主義論を事例に、壺井栄が主張した日本自然主義へのアンチ・テーゼ説の正当性を指摘している。社会的な観点から日本自然主義を論じ、自然主義における御風の「文芸論的見地」と筑水の「社会論的見地」の比較によって、日本自然主義が日本文壇に定着される過程を考察し、それによって多喜二の日本自然主義に対する態度を明らかにしている。

また、集団描写の技法を取り入れながらも、作品の最後に個人の名前が登場する。これは集団描写の技法が崩れたのではなく、むしろ「蟹工船」という孤立した特殊な空間のなかに、対立する二つの階級的構造をさらに明確に見せるために名前が使われていることを論証している。

第二章の「失われたテキスト「一九二八年三月十五日」の伏せ字と削除の問題を中心に」は、一九二八年北海道で起きた「三・十五事件」という日本共産党の検挙を題材に書かれた作品に施された伏せ字と削除の問題を書誌的な観点から検討している。

この作品は多喜二の本格的な文壇デビュー作であり、特高の拷問などの残虐性を徹底的に描いている。当時の北海道で多くの労働者や学生、組合員が検挙され、多喜二は同志たちが警察の中で拷問を受けていることを知り、「その時何かの顕示をうけたように、一つの義務を感じた。この事こそ書かなければならない」として「一九二八年三月十五日」を書いた。しかし、多喜二のほとんどの作品と同様に、この作品は『戦旗』（一九二八・一一、一二）に多くの伏せ字と削除が施されたまま発表され、すぐに両号は発売禁止になった。

蔵原惟人はこの作品に対して、芸術的な欠陥を持っているという評価をした。だが、これは当時の蔵原自身が提唱していた「プロレタリア・レアリズム」の文芸的な側面より、プロレタリア文学運動の側面からの発言だった。そしてそれは、当時の権力によって歪曲される「外部検閲」の過程のなか、プロレタリア運動の陣営からの「内部検閲」によって作品が歪められたことを考慮しなかった評価であると筆者は指摘する。

この作品の拷問描写はひどく残虐なものだが、労働者出身の活動家である「渡」が拷問される描写は次第に変化していく。ノーマ・フィールドは「拷問と日常性」の「身体表現」に焦点をおいて、「渡」を「日常性を軽んじた英雄主義」として捉えている。しかし、それは初出に施された伏せ字と削除がもたらした結果であると筆者は指摘する。「一九二八年三月十五日」の初出から現在の『小

林多喜二全集』までの書誌的な比較によって初出の「渡」像を復元すれば、「渡」が拷問を「無産階級が資本家から受けている圧迫」として認識し、運動に自信を無くしたり、拷問によって歩けない時に「新鮮な憎悪」を持ったりするさまが描かれていた。このように、「一九二八年三月十五日」をめぐる伏せ字と削除の問題を検討することによって、戦前の多喜二文学における「歪曲の言説」は「外部からの歪曲」と「内部からの歪曲」によって形成されているとわかる。これは多喜二作品の誤読をもたらす重要な原因になることは明らかであり、戦後になって平野謙らによって「政治と文学」論争がなされる際に、平野謙の多喜二文学に対する「歪曲」の背景になったと筆者は指摘している。

第三章の「小林多喜二の「師走」「最後のもの」の語り手における「生活する」ことの意味」は、多喜二文学における重要な題材の一つである無産階級の「プロレタリアート」の実況とその描き方について「師走」「最後のもの」の語り手の変化を検討しながら、作者が認識している無産階級の「生活する」ことの意味と「プロレタリアート」像を考察した章である。

多喜二作品のなかに「生活」または「生活する」ことについて具体的な表現があらわれるのは「師走」（『クラルテ』一九二六・三）と「最後のもの」（一九二七年九月完成）であった。作者における原体験は作者の創作活動の大きな原動力になるが、特に多喜二における貧しい生活と恋人である田口タキとの間に経験した原体験が、後にプロレタリア作家として生きてゆくきっかけになって作者に大きな影響を与えた。そのため作者の初期時代の作品群と本格的に創作活動をした過渡期的な位置を占めている「師走」と「最後のもの」の検討は、後の多喜二の無産階級への認識の仕方を明らかにするために必要な、多喜二の原体験を意味づけることになる。

この二つの作品は同一の主題と題材をもって書かれたものであるが、使われた語り手は異なっていた。多喜二は改作をしばしばおこなった作者として知られているが、「師走」は一人称で、「最後のもの」は三人称の視点で書いている。語り手の変更は、読者に「生活する」ことの描写が与えるイメージを考慮した作者による工夫であると考えられる。「師走」の「私」は、「郁子」に「生活する」ことの意味を聞かれ、貧窮な生活のために「淫売」をしてしまうことを知って悩む。このことは「私」という語り手によって読者に示されている。しかし、「最後のもの」では、「生活する」ことなど物語の事件から一步退いて客観的に語る三人称で読者に語られている。「師走」の「私」は、「郁子」の「淫売した事実」から受けた語り手自身の衝撃のために、「郁子」が置かれている状況を冷静に読者に語るができなかった。が、「最後のもの」の語り手は、「哲夫」から送られた手紙を見た「お恵」が彼女自身の置かれている境遇を考えている場面などで、彼女の心理にあまり干渉せずに距離を置く。このようなこの語り手の変化によって、生活的心理的リアリティの説得力を得ている。以上のように、「語り手」の役割の変化は、貧困層であるプロレタリアートの「生活する」ことに大きな意味を意味を持っていたことを筆者は指摘している。

第四章の「小林多喜二の「安子」における女性人物の表現—「党生活者」笠原をめぐる「歪曲の

言説」との関係から」は、新聞小説である「安子」の女性人物の表現を検討し、戦後平野謙によって提起された「政治と文学」論争における「歪曲の言説」の問題を扱っている。「安子」は多喜二の作品のなかで、伏せ字と削除、発禁などがされていない稀有な作品であり、はじめ「新女性気質」というタイトルで『都新聞』（一九三一・八・二三・～一〇・三一）に掲載された。

多喜二は、習作時代には人道主義的な傾向の女性人物像をしばしば描き、後に本格的な創作に取りかかる際には、はっきりしたプロレタリアートの階級認識を持つ新しい女性像を描こうとした。しかし、今まで多喜二文学における女性人物像を論じる際に、田口タキとの関係からの言説がしばしば語られた。しかし、そのような言説は、小笠原克が多喜二の初期作品を読むキータームとして「多喜二＝タキ」世界」の導入による定着、つまり多喜二作品の女性人物のイメージの固定化から生じた言説であると筆者はしている。

さらに戦後になって、平野謙が「党生活者」（『中央公論』一九三三・四、五）に登場する笠原の描き方を論じ、多喜二の女性観や人間観を問題視して多喜二文学をめぐるもう一つの「歪曲の言説」を形成した。これは「党生活者」に登場する笠原という女性を活動家佐々木がハウスキーパーとして利用していたという平野謙の主張であり、この発言によって平野謙、荒正人対中野重治の間で「政治と文学」論争に発展した。しかし、それは島村輝が指摘したように、終戦直後に実証的な資料がないままにおこなわれた議論で、後に当事者からの意見の修正や留保によって今日にはあまり通用しなくなった議論である。問題になるのは「政治と文学」論争の後、実証的な資料を検討することができる状況になったにも関わらず、再び「党生活者」のハウスキーパーの問題に触れ、作者の実生活の女性観や人間観を批判した研究があらわれたことである。

これに対して中野重治や宮本顕治、宮本百合子らによってハウスキーパー制度の存在が否認され、「個々の党員がそれぞれふさわしい婦人党員と同居」することは自由であり党は干渉していなかったが、その党員の検挙によって「警視庁がこれをさまざまな猟奇的歪曲によってセンセーショナルな報道」をしたと証言した。このような多喜二の「党生活者」をめぐる「政治と文学」論争は今日にあまり通用しない言説になったにもかかわらず、今日でもしばしば研究者の間で論じられることになる。そして、平野謙の発言から発展して形成されたこのような「歪曲の言説」は、多喜二の作品を受容する読者に誤読を招く可能性を残した。

多喜二の女性人物の描写をめぐるさまざまな誤解と誤読は「歪曲の言説」によるが、多喜二が描きたかった階級認識をもつ女性人物として、笠原の描写には物足りないところがある。当時作者が非合法活動に入り、警察に追われる状況で書き上げた作品で改稿や続きを書く余裕がなかったために、現在の笠原像ができたと思われる。一方で、このような状況から作者が追求した新しい女性像の原型は、「安子」の中のお恵に見出すことができる。初期作品時代の「滝子もの」の人道主義的な女性像から、プロレタリアートの新しい女性像を描くために尽力した多喜二は、何も知らない貧しい百姓の娘でありながら、厳しい生活と現実の前に諦めることなく生きてゆくお恵という女性を創作した。このことから、多喜二はごく普通の日本の女性たちの中からプロレタリアートの女性像を見出し、そのような姿を描こうとしていたと筆者は指摘している。

第五章の「『蟹工船』の韓国語訳をめぐる読者の階級認識」は、「蟹工船ブーム」についてその社会的な背景を追究しながら、多喜二作品を受容する世界の事例として韓国語新訳『蟹工船』の出版をめぐる事情を論じている。この現象の背景には日本の格差社会に苦しんだロスジェネ世代がいた。しかし、それは日本だけではなく世界に広まっている問題であり、韓国にも影響を受けて苦しんでいる「88万ウォン世代」がいた。国が違っても、この世代は非正規雇用やワーキング・プアに苦しんでいる世代である。

日本の「蟹工船ブーム」が起きている同時期の韓国では、新自由主義を押し出した李明博政権に対して蠟燭抗議デモがおこなわれ、次第にデモは李明博政権の新自由主義路線に対する反対運動に変化していった。牛肉の再輸入反対運動が国の政策への反対運動に変化した理由は、新自由主義に対する市民たちの危機意識からだった。一九九七年のIMF金融危機以来、韓国はIMF管理体制によって新自由主義路線の政策を採っていた。そのために非正規雇用社員の増加や貧富の格差の拡大などさまざまな問題が起きており、その最中にいたのが「88万ウォン世代」と呼ばれる若者たちだった。

このように毎日デモが起きている韓国社会に日本の「蟹工船ブーム」が報じられ、二〇〇八年八月に新訳『蟹工船』（筆者・梁喜辰の翻訳による）が出版された。もともと韓国の多喜二研究はあまり盛んにおこなわれていなかったが、一部の研究者によって数少ない論文や単行本が発表されていた。最初の韓国語訳の『蟹工船』は一九八七年イ・グィウォン（이귀원）による翻訳本が出版されたが、すぐ絶版になった。軍事政権に代わり民間政権が登場した時代は、もはや左翼系のプロレタリア文学などが読まれる時代ではなかったからである。その後、二〇〇八年新訳『蟹工船』が出版された際の表紙にある「なぜ今小林多喜二なのか？／88万ウォン世代、非正規職、両極化、ワーキング・プア（Working Poor）…／もしかしてこの現象が蟹工船ではないでしょうか？／30万人の日本の読者が再発見した話題の小説」の表記は、新訳『蟹工船』の翻訳事情を物語っている。

多喜二は、日本資本主義が国内を超えて膨張主義に走っている時期の労働者に、「帝国主義戦争に、絶対反対しなければならぬ」と訴えていた。これは無産階級を意識している発言であり、集団描写の創作技法の工夫から労働者という読者を想定して書かれたことがわかる。時代を超えて今日に作者の作品を求めているのは「88万ウォン世代」や「ロスジェネ世代」という若い労働者である。特に作者は、無産階級労働者の読者が作品を読むことを望んだ。そのような多喜二の意図は今でも引き継がれており、今日に「蟹工船ブーム」が起きた原因はここにあったと筆者は指摘している。

以上のように、本論文は多喜二作品と日本文学史との関係から、「歪曲の言説」が形成される過程を確認し、今日に多喜二作品を再読することの意味を追究している。「蟹工船ブーム」の背景には作者の時代と今日の時代の類似性があったという。一九二九年に起きた世界大恐慌と二〇〇八年に起きた「一〇〇年に一度の金融危機」という歴史的な時代の類似性、そして当時激動の時代に現実の問題と闘った作者を通して、今の問題はどこにあるか求めている読者の要請があった。多喜二文学に対する権力側の執拗な歪曲と抹殺にも関わらず、作者が残した主張と文学的な意義は今日ま

で引き継がれており、文学の終焉が語られる今日こそ、再び蘇った多喜二を改めて再読する必要があると筆者は結んでいる。

### 3. 本論文への評価

本論文は多くの点で学問的な意義を有している。

第一の意義は、小林多喜二作品のこれまでの受容において、どのような歪曲の力学がはたらいてきたのかを詳細に明らかにしたことである。多喜二の同時代には、当時の権力による検閲という外部的な歪曲と、検閲や処分をおそれる自主的な表現の規制という内部的な歪曲があった。後の時代においては、作者の意図に基づく忠実な原稿の復元がなされていない状況で多喜二作品が論じられたり、「プロレタリア文学の作品」「権力と闘った作家」といったイメージの固定化がなされたりするという歪曲もあった。こうした歪曲の歴史と歪曲の力学の総体を解明し、それによって、これまでの多喜二研究で必ずしも重視されてこなかった作品を含めた新たな作品の考察を提示したことが、本論文の第一の意義である。

第二の意義は、日本自然主義文学を参照しながら多喜二文学の意味を考え、多喜二を日本文学史に位置づけようとしたことである。本論文で考察しているように、多喜二文学は後代においても「プロレタリア文学の作品」「権力と闘った作家」といったイメージの固定化が強く作用し、日本文学史においても特殊な存在としてとらえられる傾向があった。しかし、本論文は、多喜二文学をそれに先立つ日本自然主義文学との関係を重視してとらえ、それによって『蟹工船』の集団描写の方法が採られた必然性を明らかにしている。こうした姿勢によって、多喜二文学を日本文学史に位置づけようとしていることが本論文の第二の意義である。

第三の意義は、今日の世界的な多喜二研究の動向をふまえ、それに同期した研究成果を示したことである。この十年ほどの多喜二研究はそれまでの長い研究史を一気に変え、急激に研究の広がりや深化を見せた。この研究動向によって、多喜二研究は世界的な「多喜二学」とも呼べるような研究分野に押し上げられ、もはや日本語に限らない世界文学としての研究分野を形成している。本論文は、筆者自身による韓国語翻訳を媒介に韓国における『蟹工船』受容の意義を考察するなど、世界的な視野で多喜二作品の今日的な意味を解明している。このような世界的な多喜二研究を視野に入れた高いレベルの研究成果を示したことが、本論文の第三の意義である。

このように、本論文は従来小林多喜二の文学に対して新しい発想から考察を進めており、研究史においてきわめて重要な意義を持つ論文として評価することができる。

### 4. 本論文の課題

本論文には、前章に示したような多くの意義が認められる。ただし、本論文が持ついくつかの課題についても指摘しておきたい。

本論文の課題は、本論文の意義と表裏一体である。本論文は、世界的な「多喜二学」の水準を視野に入れ、多喜二文学の世界的な再評価の意味と可能性を考察している。また、日本自然主義との関係を重視し、多喜二文学を日本文学史の中に位置づけようとする大きな構想を持って考察にあたっている。これらはいずれも本論文の重要な意義であるものの、きわめて大きな課題であり、本論文だけではとうてい論じ尽くせる課題ではない。

具体的には、日本文学史における位置づけを考察するのに日本自然主義との関係だけではなく、さらに幅広い視野を持って多くの日本文学作品との関係を考察する必要がある。表現技法面と思想面の両面において、さらなる研究の進展を望みたい。また、世界的な「多喜二学」は多様であり、かつその動向は日々刻々変化している。そのような世界レベルの研究に対して、さらに視野を広げ、ここでの研究成果を発展させていくことが必要である。

他にも、近年は多喜二資料のDVDデータ化など資料面の整備が進んでいるので、その点へのさらなる目配りが求められる。また、留学生の日本語論文としてはかなり高いレベルにあるものの、細かい表現の点においては改善を求めたい部分も見られた。

以上のような課題は最終試験において審査委員から詳細に指摘されたものの、筆者は適切な回答をおこない、これらの課題について自覚的であることを示していた。ここに言及したような課題は、筆者の今後の研究活動の中で真摯に取り組まれ、解決されていくものと考えられる。

## 5. 結論

以上の点を総合的に考え合わせた結果、審査委員は本論文が研究史的に大きな意義を持つことを認め、全員一致で本論文に博士（文学）の学位を授与することが適当であるとの結論に達した。